

演題 40. 検体中のさまざまな要因が測定値に与える影響 その3 溶血について

○淵上孝一 上野芳人（玄々堂君津病院）

【はじめに】

日常生化学検査において、検体の溶血が測定値に影響を与えることが知られている。したがって、検体が溶血していた場合は、再採血し肉眼的溶血のない検体を測定し報告することが望ましい。しかし、現状は患者の負担などの理由により再採血することなく溶血検体を測定し、結果を報告するが多い。溶血検体の測定値への影響は、臨床医はそれほど詳細には把握していない。したがって検査をおこなう者が把握しておく必要がある。今回は、溶血の影響を再確認するため、溶血検体の再検証をおこなったので報告する。さらに溶血検体の測定値への影響が、検体によって差がみられることも再検証したので報告する。

【測定装置・試薬】

日立 7180 型自動分析装置で、当院で日常使用している試薬を使用した。

【方法】

①溶血液の測定値、②溶血液の吸収曲線、③溶血液の色調とHb濃度、④溶血液の成分の解析等。

なお、溶血液は洗浄赤血球を処理したのち、溶血させて作製し検討した。

【結果およびまとめ】

今回の実験から、溶血は検査項目に影響を与えることが改めて確認された。さらに色調やHb濃度から測定値の変動量を特定することは困難であることも再確認された。しかし、吸収波長など溶血の実態を理解しておくことにより、臨床へのアドバイスが可能になれば、溶血誤差への誤解も減らすことができ、より臨床への要望に答えられるのではないかと考える。

連絡先：0439-52-2366